
英雄王に拾われし子

七瀬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄王に拾われし子

【Zコード】

N1481Y

【作者名】

七瀬

【あらすじ】

Fate/zeroの最後にギルガメッシュに拾われた赤子の話。

もちろん一次創作であり、原作は一切関係ありません。

亀更新ですが、どうかお付き合いください。

「雑種よ、我が気まぐれに預かったことを光栄に思つがいい……千

代先まで誇れようだ
「やひみだ

始まり

辺りを埋め尽くすのは黒い炎。

道にあるのは死体の山。
さながら地獄絵図である。

そんな中、悠々と闊歩する男がいた。

満身創痍でありながら、しかしどこか高貴な雰囲気をかもしだす金
髪の男。

自身から流れる血には氣も止めず、この地獄絵図を見て回っている。

「受肉、とはなんたる感覚か……なんとも言ひがたい」

男は口を確かめるかのように歩みを進めた。

そして、すでに死んでいる母親らしき死体に守られるよつとして安
らかに眠っている赤子を見つけた。

Hの仮あぐれ

赤子を片手に抱え、男は考えた。

「なぜ我は」のような雑種を拾つた

男の手に抱かれ、すやすやと寝息をたてている赤子は、何が起つてこるのか全くわかつてはいないのだろう。

「…………わからん」

男はしじばし赤子を眺めたあと、齒くよつに皿つと、また歩き出した。

「バスは…………切れているか…………肝心なときに使えんヤツだ。まあ、いい。ならば暫しの観光とするか」

男はどうでも良さそうに、しかし赤子は手から離すことなくまた歩き出した。

英雄と赤子

災害地から抜け出した男が最初にとつた行動は住居の確保だった。

適当な家にズカズカと入り込み、リュックいっぱいの札束を投げすていい放つ。

「今からコレは我的物だ。金はくれてやる。今すぐ失せろ、雑種」

家主は何事かと思ったが、目の前の大金に抗うすべはなかった。

「うして比較的大きな家を手にいれた男。

しかし彼は満足はしなかった。

「1Jの程度の家でわざかながらとはいえ住まねばならぬとは……」

はやいうちに新しい家を調達しようと決めた男であった。

彼が家に入り、最初にしたことは赤子の世話をある。

天上天下唯我独尊を地でいく男とは思えない行動であった。

「牛乳を飲むのではないのか……？」

しかし男は育児にはほとんど疎かだった。

だが、自分のモノを自分で管理できないなどとは自身の性格が許さず、男は育児マニュアルを片手に赤子に向かい合いつのであった。

「やつてこられるか！ 王たるこの我がこのよつなことをしなければならん！」

赤子を拾つて三回転、男はついに匙を投げた。

もともと「うごう」とは野の得意とすることではないのだ。

今にも家を出でこいつである男を赤子はじっと見つめていた。

「な、なんだその田は……」

多少の情が移つたのか男の足と決意は鈍つた。

もつとも、男が情を誰かに『える』こと血体、奇跡のようなものなのだが。

「ええい！ こちらを見るな！」

男が赤子に近づくと、赤子はそれは嬉しそうにわいわいのであった。

英雄王のお引っ越し（前書き）

1話1話が短いですが、何回か更新してこまでもので、「勘弁を……」

英雄王のお引っ越し

「王たる」ことなどいふに長々といはれるか！」

男はついに我慢の限界だった。

赤子がいる手前、無理に居場所を転々としていてはあらぬ不快感を赤子に与えかねない、そう考え男曰くボロ小屋（一般人にすればわざと豪邸）にとどまるここと約3ヶ月……

男の不満が臨界点を突破した。

「「ごぞー！ 貴様」」ときには氣など使つてられん！」

言つなり男の行動は速かつた。

荷物ひとつ持たず赤子を腕に抱えると家を飛び出した。

それでも赤子が苦しまないよう優しく抱えているあたり、男の赤子に対する情の深さが見てとれる。

そもそも男が1個体に情をかけるなど、それこそ天地がひっくり返るうともあり得ないのだ。

そもそも男自身が不快感を我慢して世話をするなど宇宙が滅びてもあり得ない。

にも関わらず、にも関わらずだ、男は赤子を今もなお世話をしている。

これは気まぐれなどと云ふ領域を明らかにしている。

「ふむ……及第点どころか……」

男が目をつけたのは少し古風な和風の家。

まさに『和』という感じの家であった。

「君は今から我のものだ！」

そしてまた、男は家を見てにいれるのであった。

英雄王と赤子の一日（前書き）

こんなギルガメッシュもさんざいでもいいはず。

英雄王と赤子の一日

「ギー、ギー！」

「貴様……いまなんといった……？」

男は衝撃を受けた。

男が驚くことなど百年に一度とない。

それ故に男は赤子に聞き返した。

「ギー、ギー！」

「ふはは……フハハハハハ！　名前を！　我的名前を呼んだぞ！　た
だの人間ごときの赤子が！　我的名前を！」

男、ギルガメッシュは歓喜した。

なぜこのように感情が昂るのかはわからない。

しかし、ギルガメッシュはひたすら赤子を腕に抱いて喜び、そして

……

「ふははー……素晴らしいぞ！……流石ではないかー…………？」

そして、自分の致命的な失念に気がついた。

「「」やつの……名前が……ない！」

ギルガメッシュは頭をかかえた。

なぜこのような初步的なことを忘れていたのか、王たる自分にあるまじき失態である、と。

「仕方がない、「」の我自らが名前をくれてやるのよ。光栄に思うがいい！」

フハハと高笑いをしたあと、ギルガメッシュは途端に真剣な表情になり、名前を考え始めた。

「やはり我の名前は入れねばな……ギルドレン……ギルランデ……
メリシュなども……」

凄まじい名前である。

こんな名前をつけられては将来、有望ないじめられっ子にならうことだろう。

もつとも、そんなことになれば、ギルガメッシュは全身全靈で相手を殺すだろ？が……

「しまった！ こやつは冬木、日本の、東洋の人間！ 我のような名前はつけられん！」

ギルガメッシュがこの事に気がついたのは必死に名前を考えはじめてから5時間後のことである。

「ええい！ どうしようと云つのだ！ 王たる我が何故ここまで苦労して考えねばならんのだ！」

そういうながらもギルガメッシュは笑顔であった。

すでに立派な親の顔である。

「我にここまでさせるのだ……世界一幸せな赤子よのう……」

そつこつとギルガメッシュは再び思考の波に身を委ねた。

英雄王と赤子の名前

「ギール、ギール！」

「恭介、ギールではない、ギルだ」

「ギール、ギール！」

「ふつ……まだまだ幼いか……」

ギルガメッシュは二日もの間考え続け、ついに赤子に名をつけた。

恭介、それが赤子の名前である、

「我の子なのだ、地球一強い男子になろうぜ……」

最強だから強になんかつけて強介見映えが悪いから変えて恭介。

なんとこいことだらうか、まともである。

ギルガメッシュという男が名づけたにしては気持ち悪いほどに普通である。

「おおー!? き、恭介えええー!! 貴様、歩けるのではないかあああー!？」

「あーあー、ギール、ギール!」

はたしてこの男は本当に英雄王なのだろうか。

今の彼を見た者全員がそんな疑問が沸き上がるほどにギルガメッシュは赤子、もとい恭介の成長に狂喜乱舞していた。

正直、ギルガメッシュ自身、何故ここまで恭介に入れ込んでいるのかわからない。

だからギルガメッシュは考へることをやめた。

かつて飼い慣らしたライオンに向けた些細な情より強く固い情を恭介に感じていた。

自身の感情、唯一無一のもの、なればこそ自分がどうしようが自分の勝手。

これから先はどうなるかはわからない、途端に興味が薄れ捨てるかもしれない、はたまた情が続くかもしれない、ギルガメッシュはその時までは今まで通り情をかけてやることにしていた。

「フハハハハ、恭介は幸運なやつだ……」

「うー？」

「フン、こましづりく貴様に情をかけてやる」とひょい、感謝せよ

「あー！」

恭介は訳もわからずただただギルガメッシュの腕の中で笑うのであつた。

英雄王と継子愛（前書き）

1200文字程度に長くしてみました。

いかがでいいですかね？

じまひへせりのへりこで書こうといつと頃こめす。

結果から言おう。

恭介という人間は大変幸運な人間であった。

今はまだ幼稚園児だが、すでにその片鱗をみせている。

彼が砂場で遊べば砂金が山のように沸き、穴を掘れば埋蔵金が見つかり、くじを引くこと十数回、すべて一等を当て、マークテストをやらせればいかなる難易度であろうとも九割は正解を叩き出す。

もはや呪いの域である。

さらにギルガメッシュという男に育てられたこともあってか、黄金率まで身に付いていた。

しかし……

「恭介が倒れたとは誠かああああ！？ 恭介！ 恭介ええええ！！」

「恭介くんのお父様！？ 落ち着いてください！」

しかし、恭介という人間は非常に病弱であった。

そもそものはず、恭介がいた、あの環境下において全くの無傷であるわけがないのだ。

恭介が倒れたとギルガメッシュに報告が来たのは約一分前である。

ギルガメッシュは幼稚園の先生に詰め寄ると肩を強く揺すつた。

「落ち着けだと…？　ふぞけるな…！　恭介が！　我の息子が倒れたのだぞ！？　落ち着ける方が狂つてあるわ…！　それにも関わらず落ち着けだと…？　どうやらそりと死にたいとみえるな…？」

「ひ、ひ………」

殺氣全開で今にも殺しかねないほどの熱いでさりに詰め寄るギルガメッシュに幼稚園の先生は悲鳴をあげた。

「恭介！　恭介ええええ…！」

「き、恭介くんの体調にさわります…。」

「なにつ…？」

勇気ある幼稚園の先生の言葉にギルガメッシュは固まつた。

「くつ……恭介が倒れたといつのに、何故、何故我はなにもできな
い……ツー」

ギルガメッシュは自分の行動を悔やみ、そして己の無力を憎んだ。

「とりあえず、恭介くんは連れて帰りますか？」

「当たり前だー。」

ギルガメッシュは答えるや否や恭介を優しく抱えると幼稚園を後にした。

恭介が目覚めたのはギルガメッシュが恭介を家に運んでから3時間後だった。

「おとうさん……？」

「おおーー。目が覚めたかー?」

「あ……うん。おはよー……」

恭介はいまいち何があつたのか理解できていないようだが、ギルガメッシュ、父親の顔を見ると、安心したように体から力を抜いて微笑んだ。

「大丈夫か？ どこか痛いところはないか！？」

「だ、大丈夫だよ……？」

ギルガメッシュの勢いに若干押され氣味に恭介は答えた。

「大丈夫な訳がなかろうー！ 今月に入つて三度、恭介は倒れておるのだぞ！？」

「あ、僕、また倒れたんだ……」

恭介は自分が倒れたことを知り、父親に対する感謝と罪悪感を感じていた。

「父さんは、またずっと僕を見ていてくれたの？」

「当たり前であろう。」

「やつか……」めんね

「いめん……だと？」

恭介のその言葉がギルガメッシュの怒りに触れた。

「ふざけるなよ、恭介。我はお前の世話を苦だと思っている、とでも思つてこらのか？」

「え……」

「だとしたならば、恭介。お前はこの俺を侮辱したことにならぬ

「我はお前の父親なるが？ 息子の世話をすることだが何故、苦に思えようか」

「父さん……」

「子供は黙つて親の気持ちを享受せよ

「……ありがと」

「わかつたならば黙つて寝てろ。この王たる我自らが恭介のために食事を用意してやうひ」

ギルガメッシュはそつ言つと部屋を出た。

部屋には涙をながす恭介だけが残つた。

英雄王と親子愛（後書き）

ギル「恭介ええええ！！！ かつこいいぞー！」

先生「あの、お父様、お静かに……」

ギル「恭介の初の晴れ舞台なるぞ？ 邪魔するな。恭介ええええ！」

先生「他の児童の皆様の晴れ舞台を激しく邪魔していますから！」

ギル「他の雑種なぞ知つたことか。恭介えええ！」

先生「あああ、こままではかつてない入園式になつてしいます……」

ギル「しるか。恭介ええええ！！！ ……バッテリーが切れた……だと！？」

先生「それでしたら静かに……」

ギル「おい、そこの雑種。貴様のビデオを使ってやる。ありがたく
献上せよ」

先生「恭介くんのお父様ああああーーー？」

このあと恭介の

「おとーさん、めつ！」
の一言でギルガメッシュは静かになった。

幼稚園の先生にトラウマを植え付けた恭介の入園式だった。

英雄王と今後の方針（前書き）

感想がたくさん、ありがとうございます。

とても励みになつておつます。

ここまでくると更新しなければ……という義務感が沸いたりします。

英雄王と今後の方針

「変化はあるか？」

「……なにもない……かな？」

「これも……ダメだとこうのか……」

ギルガメッシュは度々恭介の虚弱体質を治そうとしていた。

しかしどれも望む結果は得られていない。

「次はどうするか……」

「そんなに無理しなくても……」

「馬鹿者が！ 息子の人並みの幸せを願つて何が悪い

「僕はからだが弱くても父さんがいれば幸せだよ？」

「恭介……」

息子の言葉を脳内でひたすらコピーして再生しながらギルガメッシュはさりに考えた。

今までにも散々、手は廻していく。

どのような傷もたちどころに治す秘薬、どのような呪いの類いも治す解呪石、反対に体を強化し打ち消しあう、あらゆる縛りから解放される短刀……

これらその他にも様々なことを試してきたが、どれも失敗に終わっている。

「やはり……泥……か」

ギルガメッシュには心当たりがあった。

恭介がいたのは聖杯の泥が溢れるあの環境である。

何らかの被害にあつていたのはいわば当たり前と言えよう。

むしろ、虚弱体質になつただけ、といつのは不幸中の幸いを通り越している。

恭介がいかに幸運な人間かがわかる。

「あの聖杯の汚染具合からして、何があつてもおかしくはあるまい……となれば、おそらく次の聖杯戦争まで50年とかかるま……」

「泥による呪い類いなら、本来の聖杯の力により浄化するほかあるまいか……」

「せーはい？」

「なに、恭介は心配いらん。我にすべて任せよ」

「んー……」

恭介はいまいち納得がいかない感じだったが、一先ずは頷いた。

そんな恭介によくできた息子だと感心しながら、ギルガメッシュはこれからのことを考えはじめた。

第一に聖杯戦争に参加するためにはマスターの資格たる令呪が必要だ。

これを他のマスターから奪いとる必要がある。

次に、魔力供給、ただ生活をするだけではギルガメッシュは魔力を必要とはしないが、宝具をつかうとなれば話は変わってくる。

早急に手立てを考えねばならない。

そして最後に、聖杯自体である。

知つての通り、あの聖杯は汚染されている。

それを破壊したがためにあの事態に陥つた。

とあらば、聖杯を聖杯たる状態に浄化し、本来の聖杯の力により恭介を治す。

そのためには、一先ずは汚染されている聖杯を手にいれなければならぬ。

「この三つが大きな問題点……ふつ、まあ、よい。王たる我……父親たる我に不可能などありはせんわ！ フハハハハハ

「いきなりどうしたのー？ おとづれーん！」

今日も今日とてギルガメッシュは賑やかだった。

それから一日後、ギルガメッシュは一人でアメリカの巨大な博物館に来ていた。

「どれもこれも紛い物にグズばかり……つまりん」

どれもこれも歴史的には名のある有名なものが、ギルガメッシュュにては「ノリも回り」。

悠々と博物館を闊歩するギルガメッシュュ。

そしてあるものに皿が止まつた。

「空氣を発生させ続ける石……か」

ギルガメッシュュはこれを使えないかと考えた。

「一先ずは試してやるとしよう!」

ギルガメッシュュは言ひやせぬや、管理室へと向かつた。

それから10分、博物館はギルガメッシュュのものとなつた。

「案外、すんなりいつたか……」

ギルガメッシュの目の前には、魔力を放出し続ける石があった。

本気を出したギルガメッシュは、約3時間程度で完成させた。

持てるかぎりの宝物^{ほうもつ}を使い、空気を魔力に変換、効果を拡大させ、一切の消耗をしないように物質変換した。

結果、半永久的に魔力を放出する物質が出来上がった。

「効果は眉唾物だが、試す価値はあるつ

ギルガメッシュはその物質を飲み込んだ。

「……ふむ、悪くない。時臣以上の魔力はある……か

「ただ、効果をあげすぎたか、流れる魔力が多くすぎる。これではあと10年ともたん。この我が失敗……？ ふん、笑わせるな。完璧に調節してくれるわ」

これから一時間後、ギルガメッシュは自身の中にある部室の調節に成功した。

最高で遠坂の魔術師クラスの魔力を最低でそこら辺の底辺魔術師クラスの魔力を自由に得られるようになつた。

「ふん、我にかかればこのようなこと造作もない」

英雄王と切嗣

「なぜ君がここにいる。アーチャー」

「貴様に答える義理などありはせんわ。しかし、貴様も中々に様になる格好よの、……雑種にふさわしい」

「……いまの僕には銃器をもつ力もないんだ。今すぐ君の頭をぶち抜いてやりたいのに、僕には不可能だ」

「あまりに滑稽な夢物語よの、……器がしれるぞ、雑種」

ギルガメッシュは切嗣の家にいた。

通常ではあり得ない組み合せ。

当人たちですから、何故こいつと話しているのか、などと疑問がわいているであろう。

「で、なんで君は僕の家にズカズカと入ってきているのかな」

「答える義理などないと何度も言わせるつもりだ?」

「不法侵入して何をいってるんだ……」

お互いの話は平行線、なかなか交わらない。

「雑種、王の話を聞きたければそれなりの態度があらう」

「君は一体何様のつもりだ！？」

「王だ！」

なんとも笑えるやり取りである。

こんな一人の会話が噛み合つことはなく、さうに時間だけが経過した。

「わかった、僕に話をきかせてくれ」

そしてついに切嗣が折れた。

彼はそうとうギルガメッシュと二人でいるのが嫌らしい。

「感情がこもっておらん、上っ面だけで我的話をきけるとでもおも

うてか、雑種？」「

「ブチン

何かが切れる音がした。

これは擬音などの類いではなく、本当に何かが切れる音がした。

「ふざけるな！ 君は一体なんなんだ！？ いきなり家に押し入つて長々と意味もなく居座り、用も話さない！ 僕が早く終わらせようとしてるのにお前一向に態度をかえない！ なんなんだお前は！ 魔弾撃ち込むぞ！？」

切嗣はついに我慢の限界だった。

それもそのはず、いきなり家に押し入つて長々と意味もなく居座り続け、さらにはあの発言の数々、誰でもキレる。

「……はあ」

ついにキレた切嗣をギルガメッシュは冷ややかに見据えたため息を一つはいた。

「なんだ……？」

「雑種よ、まだわからぬか?」

「わかる要素がないぞ?」

ギルガメッシュは静かに続けた。

「我が押し入つてやつたのはいつだ?」

「? 確か朝に土郎を見送つたあと……」

切嗣はギルガメッシュの意図する意味が理解できなまま答えた。

「……まだわからぬか。貴様は生きてる価値すらなかりつ

ギルガメッシュは立ち上ると王の財宝を展開し、中から適当に一振りの剣を取り出した。

そして切嗣めがけて突き刺した

「つー?」

かのように見えたが、ギルガメッシュの手にある剣は切嗣の横の壁に深々と突き刺さっていた。

ギルガメッシュは切嗣を壁に押し付けながら怒鳴るように言った。

「まだわからぬか!?　あの小僧はなんだ！　聖杯の入れ物……貴様の娘は一体どうした!?!？」

「な……こ……?」

切嗣は目を白黒させながら必死に理解しようと努めた。

「貴様が真に一緒にいなければならぬのは誰だ!?　あんな小僧ではなかろうが!!!」

が、切嗣には理解できない。

その上らしからぬ彼の言動を。

「答える、切嗣!!!」

「……!」

ギルガメッシュの言葉により、一気に現実に引き戻された切嗣。

「僕に……娘と呼べる人は……いない……」

「歯を食いしばれ、切嗣ツ！..」

うろたえながら答えた切嗣にギルガメッシュは切嗣が死なない程度に手加減を加えて拳を振り落とした。

「『ふつー』

壁に叩きつけられる切嗣。

「貴様は、親の心子知らずといつ言葉をしつているか？」

「……？」

「そんのは当たり前だ、何故なら、親の心とは常に子供に対しても一方通行だからだ。自分の考えを子供に押し付けても何一つまくなどいかん」

「その言葉はそういう意味じゃなゲフッ！」

「だまらんか」

ギルガメッシュは再び切嗣を殴った。

「勝手に苦しみ、娘を傷つけるな。貴様の娘は今もただ広い城で待つていいだろ？ 親が嫌いな子供などいはしない、小さい頃にこそ、親が必要だ……」

「……」

切嗣は啞然とした。

これが本当にあの英雄王、ギルガメッシュなのだろうか、と。

もし、何らかの魔術により見た目だけを変化させていると第三者から言われば、一も二もなく信じるだろ？

「……貴様には、時間がないのだろう。早くいけ

「……だが、僕は」

「ああ、めんべくちにやつよのう！ 黙つていけ！」

ギルガメッシュは懐から札のよつた物を取りだし、切嗣目掛けて投げつけた。

「なつー？」

札から光があふれだし、切嗣を包みだす。

「とりあえず会え、まずはそれからだ」

「アーチャー……っ！」

ギルガメッシュは不敵に笑みを浮かべ、光のなかにいる切嗣を見送った。

後にはギルガメッシュだけが残つた。

「さて、小僧にも一応話をしといてやろうつか。コーヒーは……ちつ、
安物しかないではないか……」

このあと散々家を荒らしたギルガメッシュは、帰ってきた土郎に父

親は出張だと告げ、衛宮宅をあとにした。

英雄王と切嗣（後書き）

ギル「名前か……明らかに東洋にしては違和感があるだらつな……」

ギル「ん？ この菓子は……」

ギル「よし、ギルバート・アルフォードにしそう」

こんな感じで名前を作ったギルガメッシュュさんでした。

「呆れたものだ。わざか一年足らずで戻つてくのとは……」

「士郎も、僕の子だからね。それ」「……」

ため息をつきながら、ギルガメッシュに切嗣は答えた。

「「」」「？」

「……な」「……？」

「イリヤ、ついてきちゃったし」

少女、イリヤが切嗣の後ろに隠れながら顔だけだして挨拶をした。

「よし、ガキよ。二つ貴様に言葉を授けてやる。一つ、我はお兄さんだ。一つ、切嗣は先が長くない。一緒にいてやれ」

「…………」

最初はキヨトソんとしていたイリヤだが、意味を理解すると笑顔で答えた。

「貴様に我が目にいれても痛くない息子と会つことを許可しよう」

「本当? しょうがないからあつてきてあげる!」

「じょうがないとはなんだ! 雑種うつうづー?」

「あははは~」

ギルガメッシュとイリヤのおいかげっこが始まり、終わつたのは一時間後だった。

「大人げないぞ、アーチャー」

「……ギルでいい」

「……は?」

「ギルと呼ぶ」とを許すといつておる。こつまでもアーチャー、
アーチャーと呼ばれるのは正直嫌気がさしてきた。恭介にもアーチ
ヤーってなに？ とか聞かれる始末。私は普通の父親でありたい

疲れたかのように答えるギルガメッシュに切嗣は内心笑いながらも、
機嫌を損ねかねないので表情には出さなかつた。

「ではギル。君は変わったな」

「知らん。恭介には我をもじれるカリスマ、または幸運をもつてる
のやもしれん。とにかくにも、我は恭介を好いておる」

「とんだ親バカだな」

「ぬかせ。貴様もそうである」

吐き捨てるよつにギルガメッシュは言ひ、切嗣を見据えた。

「やうだね。じきめできひて、イロヤサ十鵬とやりたい」とがたくさ
んできてしまつた

「……もう、永くないのか

「うん。自分の身体だ、自分が一番わかる。僕はもつ……永くない」

「やうか……」

ギルガメッシュは短く答え、庭で遊ぶ恭介とイリヤを見た。

楽しそうに遊んでいる微笑ましい光景を見て、不思議と笑みがあふれた。

「ガキはぞうする」

「どうしようかな……でも今は、一人との時間を大切にしたい」

「先送り、か……まあ、よい」

ギルガメッシュは何か思つところがあるのか、何かを考えているようだった。

「そういうえば、ギルは聖杯戦争のあとはどうしてたんだい？」

「恭介を育てていた。よくできた息子だ」

「君はギリして受肉を……」

「私は同じ父親としては貴様を認めてはいるが、王としては同じ空気を吸うのも腹立たしい。思い上がるな」

「ははは、手厳しいな」

冷たく言い放ち、自分のことは話ないと意思表示するギルガメッシュに切嗣は笑うしかなかつた。

「土郎、醤油とつて」

「ほい、あんまりかけたら身体に悪いぞ?」

「やつよ、切嗣」

子供一人に心配され、少し嬉しく、少しぬけなさそうに切嗣は笑いながら醤油を料理に垂らした。

「む…………？」

そして料理を一口、再び箸を置き、醤油を垂らした。

「じーさん、かけすぎだー！」

「からだ悪くするわよ、切嗣」

「あはは、厳しいな、二人は…………」

再び料理を口にする切嗣。

「…………」

そして無言になる。

「どうした、じーさん？」

「切嗣……？」

そんな切嗣を見て不思議に思い、一人は声をかける。

「…………しようぱい」

切嗣は箸を置き、呻くように咳いた。

「だからかけすぎだつていつたろー」

「切嗣は加減を知らないのよー

二人は笑いながら言い、再び食事を再開した。

「（味が…………しない。そつか…………もう、なのか…………）」

「じーさん？」

箸が止まる切嗣を見て士郎が声をかける。

「」の味噌汁、美味しいね

「あ！ それ、私も作ったの！」

イリヤが手を上げ大きな声で言つ。

切嗣に美味しいと言われたのが本当に嬉しいらしい。

「イリヤは、良いお嫁さんになるよ」

「やだ、切嗣つたらー」

楽しい雰囲気で進む食事は、とても危ついバランスで保たれていた。

「（僕はあと……どれくらいもつ……僕が一人に望むことは……）」

英雄王と切嗣3（前書き）

遅くなりました！

本当にすいませんでした……

週に一回は更新したい……

「わざわざ王たるこの我が見舞いにきてやつたぞ、感謝せよ」

「ギル……か」

「ずいぶんとらじこ姿になつたではないか」

「嫌味な男だね、君は」

「死に瀕しているからとて我は態度を変えんぞ」

「変えられても困るよ」

切嗣の病室に入り込んだギルガメッシュはドカッと椅子に腰をかけた。

「飲むか?」

「リリは病室だよ。それに、僕に味覚は、もつない」

「ふん、馬鹿が。酒とは、味は一の次だ。真に楽しむは、肴と飲み

相手だ

ギルガメッシュは不敵に笑みを浮かべ、グラスに並々と注いだ酒を喉に流し込んだ。

「それなら、僕はおめがねにかなつたのかな？」

「いろいろはマシ、といったところか」

「ははは、うれしいよ」

切嗣は微笑むように笑い、グラスを受け取った。

「うん、味がわからない……でも、美味しいよ

「ふん……」

しばらく一人で飲みとおしたあと、ギルガメッシュは口をひらいた。

「あと、どれくらいもつ」

「……あと、一月持たないと思つ」

「……短いな」

「長く持つの方だよ」

「そりゃ……」

一人はグラスを片手に動かなくなる。

病室を沈黙だけが支配した。

「ギル、僕はね、正義の味方になりたかったんだ」

そんな沈黙を破るように、切嗣が口をひらいた。

「ふん、戯言を」

そんな言葉を聞き、ギルガメッシュは吐き捨てるように答えた。

「うーん、割りと本気なんだけどなあ……」

「なればこそ、余程に質が悪い。何故ならば、正義の味方などといふものはならうとするものではないからだ」

「それは……」

「なにかを成し遂げ続けた結果、民衆から正義の味方と称されることはあるつ。だが、正義の味方になるのが目標になつたならば、それは……」

ギルガメッシュは酒を一気に飲み干すと、切嗣を見つめ、告げた。
「それはすでに、破綻している」

「…………」

切嗣は無表情のまま、ギルガメッシュを見る。

「それでも、それでも、僕はやつぱり……」

「ええい、眞まで言うな。そう簡単に切り捨てるものでもなかろう。そのまま朽ち果てるも良し、自分の理想を押し付けるも良し

「…………押し付ける?」

「土郎……だつたか？　あやつにも素質があろうて。貴様が今の話をしてやれば、その生涯を借り物の理想に使い果たすことだらう」

「それは……」

下を向く切嗣に笑いかけ、ギルガメッシュはこう続けた。

「せいぜい悩むがよい切嗣。貴様と過ごした短い時間は、まあ、有意義であった」

これを最後にギルガメッシュと切嗣は一度と会つことはなかつた。

「なあに？　切嗣？」

「そうだぞ、じーさん

切嗣は一人を呼び出していた。

自身の命がもう、持たないと悟ったためだった。

切嗣は病室やその他身の回りのことを手配してくれたギルガメッシュに感謝をしながら、目の前の一人を見つめた。

「僕はもう、ながくない。最後に一人と話したくてね」

「切嗣……」

「じーさん……」

精一杯の笑顔を浮かべる切嗣に一人は押し黙る。

もう、本當にながくないと、わかつた、わかつてしまつた。

「イリヤはお姉ちゃんだから、士郎のことを頼むよ。何があつても、士郎を守つてあげてほしい。しつかり者のイリヤには、言わなくても大丈夫だったかな？」

「うん……当たり前、じゃない……」

切嗣の手を握り、震えるイリヤを優しく撫でる切嗣。

「すぐに迎えにいけなくて、『あんね……僕は、なにもしてあげなかつた……』

「そんなことない……そんなことないわよ……」

涙を流すまごとをするイリヤを優しく抱きしめ、切嗣は士郎を見た。

「士郎……僕はね……」

英雄王と恭介の日常（前編）

ギルガメッシュもさすがにやあ……

書いて楽しいです。

「イリヤねーちゃん、いなくなつてから暇だなあ……」

「ふん、高貴なる恭介があのよつた雑種！」とセト群れる必要などない

「お父さん……？」

「す、すまん」

氣まずそつに茶をするギルガメッシュを見ながら恭介はため息を一つついた。

父のことは尊敬しているし、大切な人だが、こいつは直してほしいという思いからでたため息だった。

「さ、恭介……週末は釣りにでもこいつだ？　まさか父親たる我の誘いを無下になどせぬよな……？」

「そんな不安そつに言わないでよ。おひつなんかないからね」

ギルガメッシュなりの精一杯の機嫌とりに恭介は苦笑しながら返した。

「そ、そ、うか……い、いや！ 断じて！ 断じて我は不安そうな声など出してはおらぬ！ 断じてだ！」

「あはは、わかつてゐよー」

英雄王を手玉にとる恭介。
なかなかに侮れない。

これでまだ年齢が一桁だというのだから末恐ろしい。

「……本当だ」

「わかつてゐよー」

「……本当に本当だ」

「わかつてゐつてー」

「…………」

「わかつてゐつてー」

「そ、うか……」

恭介は「うう、ギルガメッシュが大好きだった。

「む？」

ギルガメッシュの膝に座ると、一緒にお茶を飲みだした。

「僕はお父さん大好きだよ？」

「そ、そうか？……ふは、フハハハハ！ 当たり前だ恭介よ。親
が嫌いな子などいはしない！ 逆に、子が嫌いな親もいはしない！
我も大好きだぞ、恭介えええ！」

「ぐるしい、ぐるしいよ父さん」

「おお、すまん！」

強く抱きしめられ苦しむ恭介に謝りを緩めるギルガメッシュ。

「お父さんは加減を知らないんだよ」

「すまん」

「外ではなおやいだ」

「すまん」

「正直恥ずかしい」

「すまん」

「幼稚園の入園式と卒園式なんかビーチオで見ておひつじトライウマだ
よ」

「……すまん」

「こつもお友達に恭介のお父さん少し変だって言われる」

「……すまん」

「あんまりひどこと、僕、悲しいよ」

「すまん……」

「な、泣きたくなつてなぞ」

「泣きたくなつてなぞ……」

「そんなお父さんが大好きだから」

恭介はギルガメッシュに抱きつきたくなるよつこに黙った。

「……すまん」

ギルガメッシュも答えるように恭介を抱きしめ返した。

「完成したぞ……！」

広い荒れ地にギルガメッシュは立っていた。

元々この荒れ地は、広大な木々が茂っていたのだが……

「これで、制御は完璧なものとなつた……宝具の解放連續五回、王の財宝の自由展開ならびに制御……完璧だ……これで……」

ギルガメッシュはその場に座ると、王の財宝におもむろに手を突っ込んだ。

「これで一切整理できていなかつた恭介の写真を整理できるつ！恥ずかしがつてアルバムは全部隠されてしまつたからな。予備を取つておいて正解だつた。ではさつそく……」

「おお！　いきなりハイハイする恭介ではないか！？　次は抱っこをせがむ恭介！　さらにこちらは初めてのお使いで、惑う恭介！　うおおおおー　ナイスだ！　ナイスだ昔の我！　流石は最古の王たるこの我！」

狂喜乱舞しながら写真を整理していくギルガメッシュ。

その手が止まった。

「！」これは……これは恭介が我のために……我のために！　初めて料理を作ってくれたときの写真！　ヤバい、これはヤバいぞおおー　黄金色に輝いている……素晴らしい……」

「なつ！？　さらには……っ！」

こんな感じでギルガメッシュが帰ったのは次の日の昼過ぎ、恭介に心配したと泣かれ、自身の首を切りそうになつたギルガメッシュであった。

英雄王ヒカルの一日（前書き）

雪、降りました。

英雄王ヒーロー 1 田

「お父さんー、起きて起きてー。」

朝一番、恭介は起きて外をみるとギルガメッシュの寝室へおしかけた。

「む……恭介か……もう少しぬかせろ……我は恭介の寝顔を夜遅くまで見ていて眠いのだ……」

「そんなことしてたのー? つてそんなことばじりでもよくて、あいや、よくはないけど。とにかく外を見てよー。」

「ああ……引っ張るな、引っ張るな恭介」

眠たそうにうめきながら、それでも起き上がり、ギルガメッシュは外を見た。

「あーじでしょー?」

「…………雪だな」

心底じうでも良さそひに言つ「ギルガメッシュ」とは対照的に田をキラキラと輝かせてくる恭介。

年に似合わざしかりした恭介だが、こうじつたまにみせる子供らしさが微笑ましい。

「雪だよ、雪ー。」

「雪だな……雪……よし、寝る」

あー寒い寒いと布団に入ろうとするギルガメッシュを恭介は止める。

「なんであるのさー。」

「寒いではないか。王たるこの我が、百歩、いや、一億万歩譲つてこの環境にあまんじているのだ。これ以上は不快な思いを堪えてたまるか！」

そういう、布団に潜ると、ギルガメッシュは再び眠つていつたまる。

「……せつかへの罰なのに」

「…………」

「お父さんとあわびたいなあー」

「…………」

「泣くよっ。」

「…………」

「ぐすん……」

「ほ、本当に泣くではないー！」

恭介がなきかけたとき、ギルガメッシュは勢いよく布団から起き上がりた。

「わ、わかった！ 起きてやるつー！ だから泣くなー！」

「…………本當に？」

「王には言はない」

「わーいー。」

とたんに笑顔になりギルガメッシュを引っ張る恭介に、騙されたと思ひながらギルガメッシュは居間へと向かつた。

「寒いな」

ギルガメッシュは席につくなり言つた。

「冬だしねー、はい、『飯』

「つむ。 いただこう」

『飯を口に運びながらギルガメッシュは恭介をみた。

「なんだ?」

『飯食べたらさ……』

「ああ、言わずともわかつておるわ」

「えへへ」

嬉しそうに笑う恭介。

『炬燵をだしてミニカンを食そつ』

「違つよーーー」

「おおうーーー」

勢いよく叫ぶ恭介に驚くギルガメッシュ。

「いや、外は寒いではないか」

「雪降つて積もつてゐるんだよ！？」

「見ればわかる。バカにするでない」

「ああ、もう…」

意地でも外にはいきたくないギルガメッシュ、反対に恭介は父親と
外で遊びたいらしい。

「お願ひ…」

「いくら恭介であろうとも、私は絶対に動かん」

いつの間に出了したのか、ギルガメッシュは炬燵に入るとミカンを片手にテレビを見だした。

これがあの英雄王とは絶対に思えない。

「……撮つてもいいから」

「なんだと……？」

「しゃ、写真、撮つても……いい、から……」

恥ずかしそうにそっぽを向きながら言つ恭介。

「恭介、その言葉に一言はないな……？」

「な、ない……よ」

「ふはは」

手を顔にあて、立ち上がるギルガメッシュ。

「フハハハハ！！ さあ、いくぞ恭介！ 何をぼそつとしている？ 早く準備をせぬか！」

「え、あ、うん……」

「ちょっとまで、恭介」

「え？ なに？」

「何を着ようとしている？」

「え、ジャンパーだけど……」

「馬鹿者が！」

「ええーー？」

恭介の肩をつかみゆするギルガメッシュ。

「毛糸の帽子やマフラー、手袋は常識である」。

「お父さんの常識で物事とはからないですよ。」

あーだ、こーだ、といいながら、一人で外で遊ぶのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1481y/>

英雄王に拾われし子

2011年11月23日21時50分発行